

特集

統合医療によるがん治療

統合医療による心と魂におけるがん治療

藤沼 秀光 藤沼医院院長



はじめに

当院の統合医療によるがん治療は、①免疫細胞の活性化、②がんのアポトーシス誘導、③新生血管抑制、の3本柱が基盤になっています。近年がんの標準治療もようやく免疫に目を向けるようになり昨年（2018年）はオプジーボ

も薬価収載され、今回は1回の投与で3000万円以上というキムリアも登場しました。

私はつねづね身体に働きかけるこの3本柱の上に「心・マインドに働きかける治療」があり、その上位にはスピリチュアルなアプローチも存在するのではないかと思いつつながら診療に当たっています。

今回は、このことについて文献と事例をまじえながら述べたいと思います。

遺伝子のスイッチをONにする心・マインド

医学の進歩は目覚ましくがんのゲノム医療ではがん細胞の遺伝子情報を分析し、1人1人に特化し

たテーラーメイドの治療法や薬を選ぶがんの個別化医療が実現されるようになっています。さらにがん抑制遺伝子のスイッチをONにするという臨床研究（エピジェネティクス）も行われていると聞きますが、2万個もあるといわれる遺伝子のスイッチのうちがんに関するスイッチだけを自由自在にコント

ルールできるようになるのは今後の研究に掛かっているでしょう。

村上和雄先生は遺伝子がONになるきっかけとして①、①物理的要因（熱、圧力、張力、訓練、運動、磁気、光、周波数など）、②食物と化学的要因（アルコール、喫煙、環境ホルモンなど）、③精神的要因（シヨック、興奮、感動、愛情、喜び、希望、不安、怒り、恨み、信条、祈り、など）を挙げています。その中でも、③の精神的要因に着目し、吉本興業の協力を得て「笑い」が遺伝子のスイッチをONにするかどうかの実験をされました。その結果遺伝子はONになり、血糖値が下がったり、NK（ナチュラルキラー）活性が上昇するのを確認しています。

岸から祈っても東海岸から祈ってもその回復に有意差はなく、祈りは距離に無関係であり、物理的なエネルギーではないことを示唆しています。

このことはラリー・ドッシー博士が著書『祈る心は、治る力』③のなかで量子物理学的アプローチについて述べています。「量子的非局在性」という現象があり、接触していた2つの素粒子が分離したとき片方の素粒子が「観測」により変化するとその状態が決定され、その変化はもう一方の片割れの素粒子に遠く何光年離れていようが瞬時に伝わり、変化した状態が同時に決定されるというものです。

私にとってかなり難解な分野ですが、これをCCUの「祈り」の研究にあてはめてみると1人のキリスト教信者を片方の素粒子に、その祈り手の心・意識を「観測」に置き換えると、1人のCCUの患者がもう一方の片割れの素粒子ということになります。しかしこの両者はもともと接触していたわけではありませんが、祈り手自身の身体には変化はおきていないようです。ドッシー博士も量子論の説明には限界があるとし、離れ

た場所からの祈りを解明しようとする研究とは、まさに心のはたらき経路を理解しようとする探求であり、「神の力がはたらいたのだ」と信じる人々の考えはどのような説明にもまして最良の説明であろうと結んでいます。

神経免疫学的には心が体に影響を与えることはよく知られていますが、第三者の心の持ち方が患者の病状に影響を与えるという事実はとても興味深く、もしも二重盲検法に則った薬の研究に第三者の祈りの介入があれば効果判定にバイアスを生じさせてしまう可能性も否定できません。

いずれにせよ、がんの患者さんに「笑い」や「祈り」を与えることは気休めではなくとても大切な行為といえるでしょう。

それとは逆に心の持ち方が血圧や血糖値を上げたり、免疫を下げることにより病気の発症や発がんの誘因になることもあるでしょう。

心が病気をつくる

ここで心が身体に悪影響を及ぼした事例をお示しします。

53歳女性のSさんです。日頃からがんや心臓病に対する恐怖心が

絶えずあり、ちょっとした症状があると採血、レントゲン、心電図、胃カメラ、CT、MRI等々あちこちで検査を受ける日々でした。どこの病院でも異常はないといわれますが当人はまったく安心していません。専門医からは心気症の診断を下され、抗うつ剤や精神安定剤を処方されました。当院初診時、人格検査を行いますと、うつの指標SDSは67点でうつの平均値（60点）を大きく超え、MASも28点で最高の不安度を示しました。一般血液検査やがんのマーカーでもまったく異常はなく、胸痛があっても心電図は正常でした。

しかし本人は納得しません。平成29年9月、ついに自ら県立心臓血管センターに入院してあらゆる精密検査を受けましたが、やはり異常は見つかりませんでした。それから1年半後の令和元年5月胸痛とともに心電図変化が出現し、冠動脈造影にて左前下行枝の75%狭窄が見つかったのです。ただちにインターベンションを施行、冠動脈ステントが留置され0%に改善しました。この方は高血圧、糖尿病、脂質異常症など冠動脈疾患のリスクとなるものは心気症以外

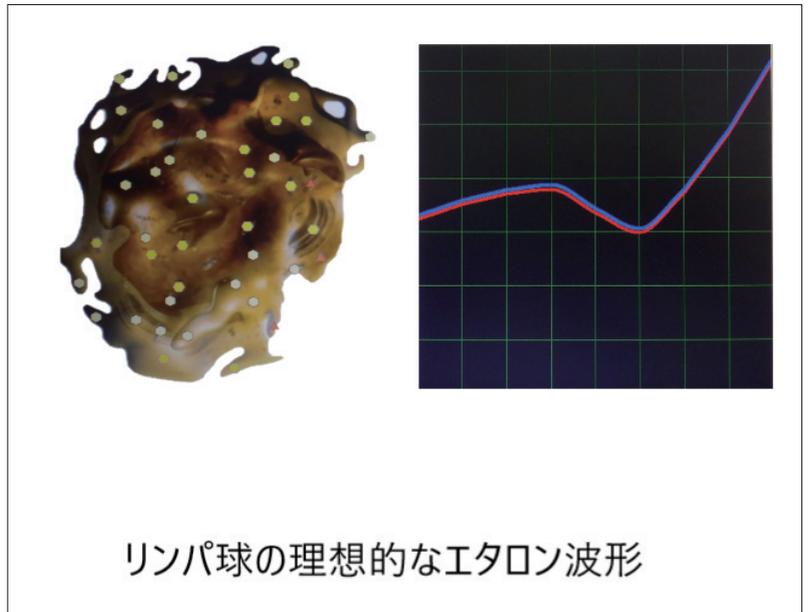


図1 青は同化を赤は異化を表し、青の線の下に赤の線がきれいに沿う理想的な波形

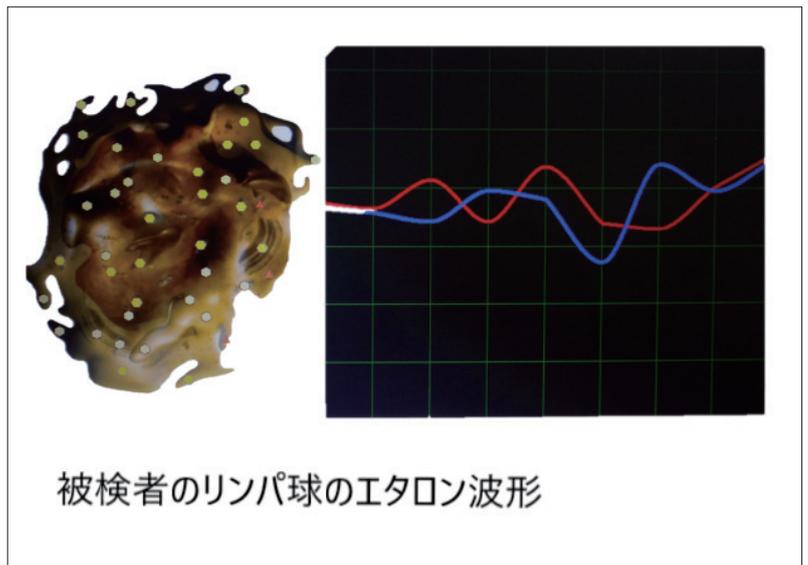


図2 青の線は同化を、赤の線は異化を表し交互に交わり不安定な状態

まったく認めませんでした。主治医もこんな短期間で狭窄が起るとはと驚いていたそうです。

このような例はノースーボ効果（思い込みにより実際に身体に悪影響が起ること）といえるかもしれません。もう冠動脈狭窄は改善しているのですが、今も相変わらず胸痛を訴えて来院しています。こんどは右冠動脈の冠攣縮性の狭心症を疑っています。

この方は心の持ち方を変えない

リンパ球の理想的なエタロン波形

限り新しい病気を生み出し続けるのかもしれない。正に病は気からです。しかし本人にとって心は自分のものであってもとらえ難い、掴みどころのないものといえるでしょう。

次にご紹介する、メタトロンによる想念測定とメタセラピーが心と身体の救いになるかもしれません。

メタトロンによる心と身体へのアプローチ

量子（トーションフィールド）理論に基づく装置「メタトロン・ホリスティック」により、被験者のチャクラ・想念・肉体のエネルギー状態は遺伝子レベルまで測定可能です。エタロン分析手法により正常で健康な臓器や組織のエタロン波形と比べて被験者のエタロン形にどれくらい隔たりがある

かを分析して疾患をあぶりだしていきます。さまざまな想念に関しても各々のエタロン波形は特定されており、測定した波形がどの想念の波形に類似しているかで被験者の想念を特定していきます。また「愛」の波形(4)と「憎しみ」の波形は丁度逆転の波形を示し、絶望の波形はなんとがんや肉腫の波形に類似しているのです。つまり、絶望の状態にいと悪性腫瘍の遺伝子スイッチがONになるのではないかと考えられます。

事実、がん患者さんを測定すると悲しみ、苦しみ、陰うつ、妬み、強い動揺などのマイナス感情を示すことが多くみられますが、これらの感情ががんの誘因になるのか、がんによってこれらの感情が生み出されているのかを知る術はありません。

先に示したSさんの想念も測定しましたが、やはり陰鬱、悲しみ、不安などのエタロン波形が出現しました。これらがアテローム動脈硬化の遺伝子スイッチをONにしたのかもしれない。

メタトロンにはホメオパシー医学で使用している砂糖粒や水にメタセラピー（メタトロンによる治療）のエネルギーを転写する機能

(リプリント)があり、レメディー(治療薬)を作成できます。たとえば悲嘆のエタロン波形を反転してリプリントしたレメディーには、悲嘆の想念を消去する作用があると考えられます。これはオーディオやジェット戦闘機のパイロット用のヘッドホンに使われているノイズキャンセリングの手法と同じ原理です。病状が改善するに従い悲嘆や悲しみのエタロン波形が気遣い、親切、勇気などに変わることが認められます。

メタトロンには心だけでなく臓器・組織・細胞のエタロン波形を測定する機能があります。

図1と図2はリンパ球の理想的なエタロン波形と被検者のリンパ球のエタロン波形を対比しています。両者のエタロン波形には大きな隔たりが認められます。そこでリンパ球の理想エタロン波形そのものを砂糖粒のレメディーにリプリントしてレメディーを作成し、免疫活性の強化を図っていきま

す。
魂が心と身体に影響する
物理学者のラストム・ロイ博士は Person=Body+Mind+Spirit であると位置付けており、私も本誌

「医師である私のがんになったら」(5)でも述べましたが、交通事故で命を落とした私の息子しか知りえない言葉が、空間から第三者の耳元に囁かれるという不思議な体験から、肉体は消えても人間の意識(魂)は空間に存在する、つまり「人間は魂・心・体で構成されている」と確信するに至りました。心は身体に影響を及ぼすことは自明の理でありますから、もし魂というものが存在すれば魂は心と身体に影響を及ぼすだろうと考えられます。それを示唆するような不思議な経験もしました。

祖母の死

昭和59年の秋、私は祖母の臨終に立ち会いました。胃がんの手術後、回復することなく坂を転げ落ちるように容態の悪化した祖母を私は築地の国立がんセンターから自宅に引き取りました。術前は通常の生活を送っていた祖母でしたが、嚥下時のつかえを精査した結果、噴門部がんだったのです。それがあと2、3日の命と宣告されてしまったのです。

自宅の一番上座、床の間のある和室に寝かせましたが、私がしてあげられる医学的処置はなにもあ

りませんでした。「ただ孫として祖母の魂を救いたい……」という一心で私は祖母の辛かったところに手を当てました。仕事の合間を縫って時間の許す限り祖母に付き添い3日3晩が経過し、祖母は黒い煤のようなものを口から吐き続けました。しかしその間、不思議と苦しむ様子はありませんでした。

私は祖母の魂の座といわれる眉間に手をかざし続け、そのまま汐が引くような穏やかで静かな最期を見送ったのです。医師としては後悔の念を拭きませんでした。孫としては何故か思い残すことはありませんでした。

自宅葬が行われましたが、弔問に訪れる人々は皆、驚きの表情を隠せませんでした。それは、75歳の祖母の顔は誰がどう見ても40歳前にしか見えなかったからです。実に35歳以上は若返ったことになりました。

実は祖父は40歳で先立っておりました。もしあの世というものがあるとすれば、祖母は三途の川を渡り40歳の夫に再会するはずで

す。75歳になった自分を夫に見せたくなかったのでしょうか……。私は2人の35年振りのあの世で

の再会を想像し、魂は永遠であると確信したのです。

治療の甲斐がなくがんに敗北することもあるでしょう。しかし、クオリティ・オブ・デス(死の質)において永遠の魂を認識することが、がんに対するスピリチュアルな勝利を意味すると考えます。

(1)村上和雄『科学者の責任』、PHP研究所 2012

(2) Randolph C. Byrd: "Positive Therapeutic Effects of Intercessory Prayer in a Coronary Care Unit Population," Southern Medical Journal 81, no. 7(July 1988):826-829.

(3)ラリー・ドゥシー『祈る心は、治る力』、株式会社日本教文社、東京、2003

(4)藤沼秀光「がん患者さんのメンタルケア」、『統合医療でがんを克つ』vol.114、2017、p.12-15

(5)吉田繁光「医師である私のがんになったら」、『統合医療でがんを克つ』vol.78、2014、p.32-33